

銭湯ペンキ絵師

つれづれ日記

第11回

田中みずき (銭湯ペンキ絵師)



ペンキ絵と言えば富士山なのか

「銭湯のペンキ絵」と言われると、青空と富士山、海や湖と松などの風景が描かれているものを思い浮かべる方が多いでしょう。

しかし、この連載を読んで下さっている方であれば、「鯉二匹を描いたものがあった」「ゴジラの絵を描いた絵も観た」と思い出して下さるかも知れません。こういったものは、近年から始まったペンキ絵のアレンジ例で……というのは嘘で、実は1970年代の雑誌や本を観ると「富士山ではないペンキ絵」の例が紹介されているのです。

多様なペンキ絵

例えば、石子順造の『キッチュ論—石子順造 著作集第一巻』(喇嘛舎、1986年)。美術や漫画、サブカルチャーの評論を手掛けた石子順造による1970年代の著作が集められ、銭湯のペンキ絵についても文章を残しています。

題して「銭湯のペンキ絵」(同上112～122頁、初出『SD』、鹿島出版社、1970年7月号)という文章の中では「図柄は、圧倒的に山紫水明の風景である。」としながらも、人物や乗物・動物などが注文中で描かれることがあり、漫画のキャラクターやハワイの風景の描かれたペンキ絵を観たといったことが書かれています。石子自身はハワイの絵を評価こそしていませんが、あるキャバレーの広告として描かれていたもので、当時は30軒以上の銭湯に同様の絵が描かれたそうです。

広告とペンキ絵の関係については2016年8月号の本連載でも書かせていただきました。昭和のある時代まで銭湯のペンキ絵は絵の下に掲示する広告のサービスとして描かれてきたものでした。現代ではそのシステムが衰退し銭湯からのご依頼で制作をするものになっていますが、ハワイの絵からは広告とペンキ絵の関係が窺えます。

なお、余談ですが、この文章内では何故かペンキ絵の多くに富士山が描かれていることが書かれていません。一方で、「模造された天然」(同上222、223頁参照、初出『FAN』、出版社不明、1971年夏号)では、イメージのパターン化の例としてパンフレットや観光写真に

写る富士山を挙げ、「銭湯の正面にあるペンキ絵の山紫水明ぶりもまた、構図といい色調といい、このパターンにのっとっている」と続けています。富士山に触れない分、「銭湯のペンキ絵」では、当時の時代を表すペンキ絵の変化が鮮明に印象に残ります。

同じく、1970年代の雑誌を観てみましょう。『SUPER ART』の「銭湯絵画二十六景」という記事(パルコ出版、1979年9月号、63～70頁)では、漫画のキャラクターやレコードジャケットを描いたペンキ絵の写真がずらりと並び、世界地図や魚の図鑑風のものなどが描かれたという例が記事で紹介されています。また、「10年程前から、漫画キャラクター路線をとりいれた。」というペンキ絵制作会社なども紹介されているのが興味深いところです。

「変化」とは何か

1970年代に注目を集めたペンキ絵アレンジは次第に減少し、ペンキ絵モチーフの「富士山」定番化がさらに進んでいったようです。個人的には、富士山という「銭湯のペンキ絵らしい」と思われているモチーフは基本として大切にしていきたいと思っています。それと共に、依頼に合わせ現代の需要を活かした富士山以外のモチーフをペンキ絵に描くことで、銭湯と現代社会とを繋いでいけるのではないかと個人的に模索してきました。珍しいペンキ絵の場合は期間を決め、後には御馴染みの富士山の絵を描くことで「変化を楽しむ」ための工夫をしています。まだまだ改良できる部分がありそうです。

1970年代、銭湯の数が減り始める前の頃にあった依頼者の需要と鑑賞者の感想を分析することで、現代ではどんな像が銭湯に求められ、どのような人が興味を持って下さるのかを考えていくことができればと思います。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。